

# まちに人と活気を呼び戻す 女川町「駅前プロムナード」の完成

宮城県女川町・「おながわ復興まちびらき2015冬」(2015年◆平成27年)



昨年12月23日からの5日間、宮城県女川町で「おながわ復興まちびらき2015冬」と題したイベントが開催された。女川町での復興イベントは、JR女川駅が開業した3月に続いて2回目。今回は、駅から海へと伸びるプロムナードと、そこに並ぶテナント型商業施設「シーパルピア女川」、「女川町まちなか交流館」のグラウンドオープンを記念したものだ。初日には、人口約7000人のまちに、約2倍近い1万2000人もの人々が来場。震災以来更地だった場所は、買い物やまち歩きを楽しむ人であふれ、女川に久々のにぎわいが戻った。

商店街入り口に開店したミニスーパー「おんま〜と」の佐藤広樹社長は、震災前は同町でスーパー「おんま〜と」を経営。津波で母、姉、祖父母と多くの従業員を失った。今回は満を持しての再出発だ。「オープンの日には、『お母さんも喜んでるね』なんて、涙を流してくれるお客さんもいて、やつぱ、ぐっときたつすね。俺らは女川の生き残りの戦士。亡くなった家族や従業員、支援してくれた人たち

のためにも、このチャンスを生かさないと」と、意気込みを語る。27のテナントのなかには、町外からの出店もある。ギター工房「セツシヨナブル」もそのひとつだ。ギターの全製作工程を見られるほか、自作できるワークショップも開催する予定だという。梶屋陽介代表取締役は語る。

「インターン、Uターンの若者やパートさんの雇用を創出するほか、ワークショップに参加した人が女川で食事や宿泊をするなどの観光資源にもなってほしい。将来は地元の木を使った『純女川産』ギターをつくり、音楽イベントなども開いて、『ギター』と言えば女川だよね」と言われる拠点になればと考えています」

## 100年先を見越した商店街

リアス式海岸に面する女川町は、東日本大震災で14・8メートルの津波に襲われ、死者・行方不明者827名、住宅の7割が全壊した。壊滅的な被害から、復興に向けての陣頭指揮を執ったのが、須田善明町長だ。今回オープンを迎えた新たな商業エリアについ



て、「まちのみんなで考え、色をつけてきた場所が、ようやく現実のものになった。将来に向かって戦うための橋頭堡が、ようやく一つ築けたと思います」と語る。

まちが商業エリアのコンセプトとしてまず考えたのは、空き店舗が並ぶシャッター通りをつくらなための方策だ。そこで、土地の所有と店の運営を切り離すテナント方式を採用。時代のニーズに合わせて流動的にテナントが入れ替わり、常に人が集まる商店街を維持できるよう工夫した。

また、震災前に比べて7割にも落ち込み、今後のさらなる過疎化も視野に入れた人口減への対策も練った。さまざまな人が集まる核として、「女川町まちなか交流館」を設立。ホールや音楽スタジオ、無料のキッズコーナー、ニーズに合わせて使える多目的室など

を設け、集客を確保できるようにもした。

これら「みんなで考える」一翼を担い、商店街の管理・運営を行ったのが、民間まちづくり会社「女川みらい創造」だ。鈴木敬幸社長は、

「店舗デザインは、女川の海や川、山とマッチングするものになりました。木造にしたのは、時代に合った形で自在に建て替えができるから。来年は女川の海産物など

女川町の海、山に調和する駅前プロムナード



特産品を販売する物産センターも完成するし、住宅が建てば購買力も高まる。100年先まで、このまちが活性化してほしいですからね」と、その胸の内を語る。

## 100年先へ続くまちづくり

駅前エリアの華やかなオープニングのいっぽう、周囲では、山々を削って高台に宅地を作り、その土を盛り土してまち全体をかさ上げする工事が、休むことなく続いている。被災者の3割が未だ仮設住宅住まいでもあり、急ピッチでの作業が待たれているのだ。前出の須田町長は語る。

「本来なら一気に工事をすれば早いのですが、女川町は平地がわずか1割強。生活を続けながら、同じ狭い空間で工事も同時に進めなければなりません。しかも、スピードは落とせない。こんなアクロパティックな作業は、我々にはできません。そこで、復興支援やまちづくりの経験が豊富なUR都市機構と、パートナーシップ協定を結んだのです」

URは2012年3月から復興

まちづくり事業を包括的・総合的にサポート。事業計画の作成や換地（土地権利の変換）設計、基礎工事など、復興事業全体をトータルに調整して遂行している。UR女川復興支援事務所長の後藤浩は語る。

「昨年3月に女川駅ができ、今回商業施設が建ったことで、ようやくまちらしさがでてきたと感慨深いです。ただ、我々の仕事は、そうしたうわものが建つ前の基盤整備や換地など、目に見えない部分が大きいです。特に、駅前の換地作業は、出店したい人や早く再建したい人などの意向を何度も調整し、ようやく合意に至りました」

求められたのは、スピードを落とさずに、どこまで質を最大化できるか。そこで、段階的な大規模工事を大きくまとめて、調査、設計、施工マネジメントを一括発注するCM（コンストラクション・マネジメント）方式を採用。通常10〜15年かかるところを半分の時間で達成する予定だ。14地区ある離半島部でも昨年末で半分の高台が完成するなど、着々と歩みを進め

後藤が続ける。「町長が、1000年に一度のまちづくりと言っていますが、いま私たちがやっているのは、何百年後かの人たちに『平成の人たちのおかげで助かった』と言われるかもしれない事業。生きがいそのものですね」

須田町長も感慨深げに語る。「女川町の復興は、山登りや登山がまだ3合目に過ぎません。土しかなかった場所に駅ができ、店ができ、家が建てる。5年たったいま、みなさんもようやく、そうした将来への実感がつかめたのではないのでしょうか。さらにこの先、全部のパーツがそろってお披露目できたときには、きつと納得いただけるかと確信しています。その瞬間には、一日中、思いっきり泣きたいですね」

町長はもちろん、工事に携わった人、すべての女川町民が、そのときを心待ちにしている。